

極上御曹司の裏の顔

目次

極上御曹司の裏の顔

5

首輪チヨウカの裏側

275

極上御曹司の裏の顔

「はあああああ……」

重たく暗いため息をついた及川真白は、胸程の高さの柵に、そつと手を置いた。

赤、白、ピンクに黄色。目の前には、見頃を迎えたローズガーデンが広がっている。ここはドイツの古城をモチーフにしたレストハウスと、アンティークな装飾がなされたガーデンが売りの、観光施設だ。山の頂上付近にあり、ロープウェイでしか来れないため観光客で大混雑するといったところのないものの、空は青く、目映い太陽の光を浴びた花々はまさに絶景。おとぎ話のような美しさをバックに、訪れた人達は皆、思い思いに写真を撮っている。

賑やかなイベントや催し物はないが、それがまたゆつたりとした大人の時間を楽しむのに一役買っていて、ここを退屈——いやいや、特別で、神聖で、ロマンティックな場所になっているのだ。

そんな中で、真白ひとりが浮かぬ顔をしている。腕を絡ませあつた若いカップルが、今にもキスをしそうなほど唇を近づけて自撮り写真を撮っているのがチラリと視界に入った。

わざわざ新幹線に乗って、泊まりの予定まで立ててやって来た旅先で、なにが楽しくて他人がちちくりあっている様を見せつけられなければならないのか。羨ましくて羨ましくて、泣いてしま

そうだ。

（ああ、もう、そういうの家でやって。お願い。ホントもう……お願いします。ああ……わたしだつて今頃は、良平と……）

大学時代から付き合っていた恋人、中村良平を思いだして、真白は思いつきりズズツと鼻を吸った。

ここには、彼と来るはずだった。

就職してから半年の秋。そろそろ仕事にも慣れてきたし、付き合つて三年記念日に合わせて計画したのがこの旅行なのだ。

旅行好きの真白が練ったプランは完璧だった。ロマンティックな雰囲気たつぷりなこのローズガーデンを見ながらふたりで手を繋いで歩き、次はロープウェイに乗って麓に下りて、観光バスで文化遺産を巡りながらの知的な会話。ワークショップを楽しんだら、夜はちよつと背伸びをしたラグジュアリーなホテルのレストランで食事。そのまま一泊して、キングサイズのベッドでいちゃいちゃするはずだった。

なのに、前日にかかつてきた彼からの電話は、予想外にも別れ話で——

『前々から思つてたんだけどさ、やつぱ俺、おまえとは合わない。旅行とか興味ないし。おまえ、セックスも下手だし、基本まぐるじゃん。おまえみたいなつまらない女、一緒にいる意味がない』  
完全に開き直つた良平の口調を思いだしたら、じわつと涙が滲んできた。

旅行には、今まで何度もふたりで行っていた。そのとき良平は、いつも楽しそうにしていたのだ。

それを別れ際になって、実は興味ありませんでしたと言われても……困惑しかない。そして告げられた、女として魅力がないと言わんばかりの台詞。

良平は真白にとって、初めての彼氏だった。大学二年の頃に同じ授業を取っていたのがきっかけで話すようになり、彼からの告白で付き合うようになったのだ。

キスもセックスも、初めては全部彼に捧げた。真白は優しい良平が大好きだったし、趣味が合っていると思っていたのだ。

地味な顔立ちなりに、彼好みの服を着たり、髪型をしたりして、小綺麗にしていた。料理も、好みの味付けを覚えた。ちょっと意地っ張りな自覚はあるけれど、良平に対しては可愛い彼女として振る舞っていたつもりだ。

だからお互い別々の会社に就職して、会うのが週末に限定されても、約束がドタキャンされるこが増えても——自分たちは大丈夫、うまくいっていると信じていた。それなのに——

初めての恋に浮かれて、恋をしているという状況に夢中になっていたのかもしれない。その結果が、これだ。肝心の恋の相手をちゃんと見ていなかったんだろう。

本当は良平にずっと無理をさせていたんじゃないか、良平はずっと前から別れたがっていたのに、間抜けな自分は彼の気持ちに気付こうともしていなかったんじゃないのか……

付き合って三年記念だからと張り切ってこんな旅行を計画する前に、もっとやるべきことがあったのかもしれない。

本当に馬鹿だ。

そしてなにより真白を惨めにさせたのは、電話の向こうから聞こえてきた他の女の声で——

(……良平、ずっと浮気してたのかなあ……わたしのこと、嫌いだったのかなあ……)

しょぼんと肩を落とした真白は、また大きなため息をついた。

(やっぱり、旅行なんかやめとけばよかったかも……)

これは前々から予定していた旅行だったから、ホテルもレストランも、代金は全額払い込み済み。昨日は別れ話のショックで呆然としていたこともあって、キャンセルまで手が回らなかったのだ。

ひと晩経てば、もう旅行当日。

「一緒に行かない？」と、友達に声をかけてはみたものの、当日の朝に、しかも泊まりの旅行の誘いはなかなかハードルが高い。当然のごとく誰も捕まらなかった。

旅行自体をやめてしまうことも考えたのだが、ホテルの当日キャンセル料は問答無用で一〇〇%。もう代金は払っているのだから、行かねば損である。それに、ひとり暮らしのアパートにいても、気落ちするばかり。行けば気分転換になるかもしれないと思ってこうして出かけてきたのだが——

「あー」

人生に疲れた声を出して、真白は気怠げに宙を仰いだ。

あのラブラブカップルが、まだ写真を撮っている気配を感じる。

もしかしたら、撮った写真に加工アプリでハートマークなんか描いて、スマートフォン待ち受け画面にした挙げ句に、「めっちゃラブラブなの〜」なんて他人に自慢をするのかもしれない。いや、そうに決まっている。羨ましすぎる！

(……………)

真白は斜め掛けしていたポーチから無言でスマートフォンを取り出すと、カップルに対抗するようにカメラアプリを起動した。

いいのだ。ひとりでもリア充してやるのだ。世の中、おひとり様が流行っているというではないか。真白もローズガーデンを背景に笑顔で写る自分の写真を友達に見せて、「ひとり旅も悪くなかったよ！」と、言ってみようのだ。

良平と別れたことを知った友達に、同情されるのなんて真つ平だ。

そう意気込んで、ローズガーデンを背景に自撮りを試みる――が、上手く撮れない。

腕をめいっぱい伸ばしても、ローズガーデンはちよこつとしか写らず、むくれた自分の顔がアツプになるだけだ。

(あーあ。なんでよりによって自撮り棒を忘れたんだろ、わたしの馬鹿)

旅行にマストアイテムの自撮り棒を忘れるなんて、普段は絶対にならないのに。これも失恋の痛手か。自撮りは諦めて、ローズガーデンの写真を何枚か撮ってみる。

だが何枚か撮ったところで、こうやって風景だけ撮影している自分が無性に寂しい人のように思えてきた。

これではいけない！ ひとり寂しい失恋傷心やさぐれ旅行の記録を残してどうする。ひとりでも充実した旅行を楽しんでいるという記録を残さなくては！

真白は誰かに写真を撮ってもらおうと辺りを見回した。

(誰かいないかな？ カップル以外で！)

もともと観光客はそう多くないし、いてもカップルやシニア世代のグループ客ばかりだ。

ロープウェイでしか来ることのできない山頂のレストハウスと、アンティークなローズガーデンなんて時代錯誤なものを、わざわざひとりで見回らうなんて酔狂な輩は真白くらい――

(あ、いた)

少し離れたベンチに、若い男の人がひとりで座っている。背凭れに身体を預け、本を読むわけでも、スマートフォンをいじるわけでもない。青空の下で、ただ座っているだけだ。

グレーのストラックスに包まれた長い脚を前に伸ばして、前髪を秋風にそよがせながら、彼は気持ちよさそうに目を細めていた。

デートの最中で、レストルームへ行った彼女を待っている……というわけではなさそうだ。

(よかった。わたし以外にもぼっちな人がいる！)

真白が直感的に彼がひとりだと感じたのは、こんなところにひとりで来る同志がほしかったからかもしれないし、彼にどこことなく特別な雰囲気があったせいかもしれない。

そんな自分の深層心理はそっちのけにして、真白は小走りで彼に近付いた。

「あの、すみません。写真を撮ってもらってもいいですか？」

自分のスマートフォンを差し出しながら話しかけると、彼はゆっくりと目を開けて、真白の顔をじっと見た。

遠くからでは気付かなかったが、恐ろしく綺麗な顔だ。青空もローズガーデンも、彼の引き立て

役にしかなかった。

年は真白と変わらないか、少し上くらいだろう。白いシャツにジャケットを羽織はっているだけに、爽さわやかでどこか気品がある。こんな美形はテレビや雑誌でしかお目にかかったことがない。サラサラな前髪から覗くすつきりとした切れ長の目に見つめられて、真白はドキリとした。

「ああ、写真ね。いいよ」

少しばかり低くて、耳に優しい声だ。

(わあ、声までイケメンだ)

真白がスマートフォンを渡すと、彼は立ち上がって辺りを見回した。とても背が高い。

「ひとり？」

「え、ええ……」

彼は真白が誰かと一緒だと思っただけで、やっぱりひとりだと不自然なんだろうか。しかし次の瞬間には、彼はなんでもないように首を傾げた。

「じゃあ、どう撮る？」

「ローズガーデンをバックをお願いします。レストハウスも入ったら嬉しいです」

通りすがりの観光客——しかも女ひとり旅——のスナップ写真の構図まで気にしてもらえたのは嬉しい。とても感じのいい人だ。さつきひとりかと聞いてきたのは、ただの確認だったのだろう。

「了解。じゃあ、もう少し下がって」

言われた通りに後ろに下がって、柵の前で振り返る。ウェーブした栗色の髪を軽く整え、意識し

て口角を上げてみた。

惨みめな顔で写りたくない。少しでも可愛く写りたかった。失恋なんて本当になんでもないんだと、友達にも自分自身にもアピールしたかったのだ。

「撮るよ。ハイ、ポーズ」

二、三枚シャッターを切ってくれた彼が、「これで大丈夫？」と、スマートフォンの画面を見せてくる。近付いた拍子にふと身体が触れ合って、思わず息を呑のんだ。

香水だろうか、強すぎないほのかな甘さと、男らしいセクシーな香りが漂ってくる。いい匂いのはずなのに、なぜだか身体が内側からゾクゾクしてきた。

「はいっ！ 大丈夫です！ ありがとうございます！」

上うわ擦すった声でそう言って、真白は受け取ったスマートフォンの画面をろくに見ずにポーチにしまった。どうにも落ち着かない。この人から早く逃げたほうがいい——本能がそう訴えている気がする。

この人は写真を撮ってくれた親切な人なのに、なぜ？

「ありがとうございます」

もう一度お礼を言ってから軽く会釈えしゃくをして、真白はすぐにその場を離れた。

しばらくガーデンを歩いて、花を眺めるふりをしつつそと背後を盗み見る。彼がさっきのベンチに座っているのが見えた。

SNS映える写真を撮ったら満足してさっさと次に移る観光客が多い中、彼だけは違う。確か

にこのローズガーデンは見事なものだが、ひとりですつと見ていて楽しいかという、それは少し違うだろうに。

(……薔薇が好きなのかな?)

そんなことを考えながらポーチからスマートフォンを取り出し、さつき彼に撮ってもらった写真を表示した。

そこにはリクエスト通りの、ローズガーデンとレストハウスを背景にした写真が収められている。中央にいる真白も、はにかみながらもちゃんと笑顔だ。アングルのせい、それとも彼の撮影技術が高いのか。地味な顔立ちの自分が、実物以上に可愛くなったように見えた。

今まで旅先でたくさんスナップ写真を撮ってきたが、こんなに可愛く写っている写真はない。

(わく、こんなに綺麗に撮ってくれたんだ!)

嬉しくなって振り返ったのだが、あのベンチに彼はもういなかった。

ローズガーデンでいい写真を撮ってもらってからテンションが上がった真白は、良平のことを頭から追いつけず勢いで、予定していた観光地を全部回った。

異人館に旧居留地。ワークショップでは、植物標本ともいわれる流行のハーバリウム作りにチャレンジしたし、中華街ではおいしいと評判の小籠包を買い食いついた。そのあとは都市型の海浜公園を回り、展望タワーにも上った。

そうして遊び倒してから、駅のコインロッカーに預けていた荷物を回収してホテルにチェックインしたのは、予定通りの午後六時半だ。

ふたりで予約したのに、ひとりでチェックインしたらなにか言われるだろうかとドキドキしていたが、意外なことにフロントではなにも言われなかった。

荷物を持ってひとりで部屋に入る。

記念日を過ごすためにと選んだ客室は、無駄に豪華だ。部屋はオーシャンビューで、窓から一望できるのは、夜景と調和の取れた海。カーペットはふかふかで、置いてある調度品もランクが高いのがひと目でわかる。普段暮らしているひとり暮らしのアパートとの差は言うまでもない。

ここは非日常だ。

記念日でもなければ、こんな豪華なホテルなんか予約しなかった。

極めつけは、キングサイズのベッド。

(……………)

真白は軽くシャワーを浴びることにした。そして、持ってきていた白いワンピースに着替える。予約したホテル内レストランは、ミシュランガイドの三ツ星だ。

披露宴会場も備わっているホテルだから、お客もドレスアップしている人が多い。外を歩き回ったチュニックとジーンズなんて格好でうろつくのは躊躇われた。

落としたメイクをやり直して、部屋に設えられた美しい縁取りのされた大きな鏡に顔を映す。鏡の端に入り込んできたベッドから、真白は意識的に目を逸らした。

これ以上、なにも考えてはいけない。

「さてと、ご飯食べに行こーっと！ レビューだと超おもしろいし、楽しみっ！」  
自分以外に誰もいないのに、わざわざ声に出して部屋から出た。

エレベーターに乗ってレストラン階に移動する。

真白が予約したのは、イタリアンレストランだ。豪華なシャンデリアが吊り下げられた広いホールには、ピアノが置かれている。とても雰囲気がいい。客層もよく、カップルや上品な家族連れが目立った。

ボーイに名前を告げると「こちらへどうぞ」と案内される。辿り着いたホールのテーブル席を見た真白は、思わずギョツとした。

席には当然のように、ふたり分のカトラリーセットが用意してあったのだ。

(しまった！ 人数を変更するの完璧に忘れてた！)

真白は既にコース料理を予約している。しかも良平を喜ばせようと思って無駄に張り切ったため、ワインやアニバーサリー用のホールケーキまで注文していた。

(どどどどどしよう!?)

席を目の前にして硬直した真白は、内心冷や汗ダラダラだ。座るに座れない。

席まで案内してくれたボーイがなにも言わなかったのは、真白の連れがあとから来るんだと思っているからかもしれない。

アニバーサリーケーキまで予約した客が、ひとり寂しく料理を食べに来るなんて思いもしないの

だろう。

(今からでも人数を変更してもらえるかなあ……)

そのためには、事情を説明しなくてはならないかもしれない。

『実は一緒に来るはずだった彼氏に昨日フラれて、わたしひとりなんです。ハハハハ。付き合って三年目記念日が、失恋記念日になりました』

……おお、神よ。こんな自分の傷口に自分で塩を塗りたくるようなことを言えというのか。あまりにも殺生じやないか。

だが、言うしかない。

けれど恥を忍んで事情を説明し、コース料理をひとり分にしてもらったところで、別注したアニバーサリーケーキだけではどうにもならないだろう。「Happy Anniversary」なんて書いてもらうようお願いしていたから、他のお客には出せないはずだ。

真白がいらしないとさえ、確実にゴミになるケーキである。お店の人にわざわざ作らせておいて、ひと口も食べないなんて、そんな失礼なことをできる神経は真白にはない。

(ぐっ……ここは腹を括ってやけ食いを……)

ふたりで食べるケーキだから一番小さな三号サイズにしたが、曲がりなりにもホールケーキ。ひとりで完食できるだろうか……想像するだけで胸焼けがしそうだが、ここは頑張るしかない。

しかし、彼氏にフラれて旅行をドタキャンされた挙げ句に、ひとりでアニバーサリーケーキを貪り食う女の姿なんて、「惨め」のひとつ言以外にないじゃないか。絶対に周りのお客はドン引きする

こと間違いなし。なんて恥ずかしい！

(ああ……やっぱり旅行自体をキャンセルするんだ……)

友達が誰も捕まらなかった時点でそうすればよかったのだ。そうしたら恥をかかずに済んだのに。真白がそう考え肩を落としたとき、すぐ横を見覚えのある人影が通り過ぎた。

「あっ！」

思わず声を上げる。するとボーイに先導されていたその人が、足を止めてゆっくりと振り返った。

「ああ、昼間の」

その人は昼間のローズガーデンで、真白が写真を頼んだ男の人だった。あのときと変わらないジャケットと白いシャツ、そしてグレーのスラックスという出で立ちだ。簡素な服装でも、相変わらず整った顔立ちは際立っている。真白が彼にすぐ気が付いたのもそのためだろう。

「また会ったな」

彼は真白に向き直ると、人好きのする笑みを浮かべた。

「旅行は楽しんでる？」

「ええ、とても」

今の気分は最低最悪だが、真白は取り繕って頷いた。

「あなたも旅行ですか？」

「ああ。ぶらりとね」

「おひとりで？」

「そうだよ。あんたもだろう？」

そう言って笑った彼を前にして、真白は急にあることを思い立った。

彼に頼めば、恥をかかずに済むかもしれない。

(この人には変に思われるかもだけど……)

この広いホールで、周りの客に見られながらひとり寂しくアニバーサリーケーキをやけ食いすることに比べれば、断然マシというもの。背に腹は代えられない。

真白はおずおずと口を開いた。

「あの……もうお食事は決められましたか？」

「ん？　ここで食べるメニューを決めたかつてこと？　まだ来たばかりだからな。これからだよ」

(やった！)

真白は藁をも掴む思いで彼に言った。

「あの、よかつたらご一緒してもらえませんか？」

「俺が？」

真白の急な申し出に驚いたようだったが、それでもこちらに事情があることは察してくれたらしい。速攻で断られてもおかしくなかったが、彼はそうしなかった。たぶん、いい人なんだろう。だから真白は勇気を振り絞って続けた。

「実は、ここに一緒に来るはずだった人が急に来られなくなりまして……。コースももう頼んでいて、お金も払っているんですけど、キャンセルするしかなくて……。その……よかつたら食べて

もらえませんか？ お金はいりませんから」

「ああ、そういうこと」

真白が手を添えたテーブルに、ふたり分のカトラリーセットが並んでいるのを見て、彼は案内をしていたボーイにひと言ふた言なにか告げた。

「じゃあ、甘えるかな」

「ありがとうございます！ 助かります」

彼の答えに安堵して、真白は大きく息をついた。

「どうぞ座ってください」

ホクホク顔で真白が席を勧めると、彼はクスリと笑って、ゆつたりと椅子に腰掛けた。

ローズガーデンでも思ったが、この人はとても感じがいい。ちよつとぶつきらぼうな口調ではあるが、動作はとても洗練されている。

宿泊客か、レストランに食事に来ただけかはわからないが、ひとり旅にこんなホテルディナーを選ぶくらいだ。実は育ちがいいのかもしれない。

どうしてローズガーデンで、この人から逃げなくてはなんて思ったんだろう？

(かつこよすぎるから、かな)

こんなイケメンが近くに来たから、あのとときの自分は妙に焦ってしまったのかもしれない。本当に綺麗な男の人だ。どこか蠱惑的である。

真白が席につくと、彼はテーブルに添えてあったメニューの一覧表を手にとって眺めた。

「へえ、一番いいコースじゃないか」

「それにプラス、ワインとケーキも頼んであります」

「そりゃ奮発したな。なんかめでたいことでもあったのか？」

なんでもない調子の彼の問いかけに、胸がズキンとする。

そう、これはお祝いだった。少なくとも真白にとっては、大切な記念日だったのだ。そして、これからも一緒にいることを良平と誓い合えたらいいと……

もつとも、そう思っていたのは、真白だけだったようだが。

「……………まあ、そんなところです。でもナシになったので……………」

「ふうん？ まあでも、俺にとつてはラッキーだな。可愛い子とタダで飯が食える」

ニツと笑った彼に見つめられて、真白ははにかみながら俯いた。

(……………可愛いって言われた……………)

場を和ませるためのお世辞だとわかりながらも、可愛いと言われれば嬉しくなる。

そんなとき、カートを押したソムリエがやって来て、グラスにワインを注いでくれた。

「ご注文のシャトー・レ・ザムルーズ・コトール・ドー・ラルディッシュ・グルナッシュでございます」

綺麗な赤色に満たされたグラスを見つめて、なんとも言えない気分を味わう。

レ・ザムルーズ——フランス語で「恋人たち」を意味するこのワインは、記念日にピッタリだとホテルの人にすすめられたもの。

就職してからワインに凝りはじめた良平が喜んでくれるかもしれないと思って注文したのだが、まさかこんなことになるとは……

(このワインはもう二度と頼まないだろうなあ)

真白が苦笑いしていると、向かいに座った彼がボソリと独り言ちた。

「……なるほどね」

「え？」

思わず聞き返す。だが彼は答えずに、そつとグラスを掲げた。

「偶然の出会いに乾杯」

自分達のことを言っているのだと気が付いて、真白は笑いながら同じようにグラスを掲げた。

「ありがとうございます。乾杯」

ワインに少し口を付けて、運ばれてきた前菜に舌鼓を打つ。生ハムにイチゴがトッピングされていたり、人參にオレンジムースが合わせられていたり、カラフルな見た目も可愛らしい。

彼はナイフとフォークを綺麗に使いながら、話を振ってくれた。

「ローズガーデンのあとはどこを回ったんだ？」

「いっぱい行きましたよ。異人館でしょ、中華街でしょ、それに展望タワーも。工房ではハーバリウムを作ったんです。知ってます？ ハーバリウムつて。乾燥させたお花をビンに入れて、特殊なオイルに浸して飾るんです。とつても綺麗なんですよ。わたし、体験型のイベントとか大好きなんです。思い出にもなるし」

見知らぬ人相手に、饒舌に話す。楽しかったんだと彼に聞かせながら、その実、自分に言い聞かせているのかもしれない。

「へえ、いいね。俺も体験型のイベントは好きだな。前にもここに来たことがあるんだけど、そのときに陶芸や、トンボ玉なんかもやったんだ」

「素敵！ わたしもやってみたいなあ。どこでできるんですか？」

「陶芸は民間の教室で、トンボ玉は美術館のイベントだったかな。俺は現地の人に教えてもらって飛び入り参加したんだけど、たぶんそういった情報はガイドブックに載ってるんじゃないか？ どつちも見てるぶんには簡単そうなんだがなあ。なかなか難しい」

彼は手で轆轤を回す仕草をしながら、平らな皿を作るのが精一杯だったと笑った。

「教えてくれる方は楽そうにやってるのに、いざ自分がとなると、全然できませんよね。でも、やってみないことにはわからないじゃないですか。意外と才能があるかもしれないし」

「あはは、そうだな。あんたは器用そうだな。なんでもそれなりにやれるんじゃないか？」

「そんなことないですよ。ほんとぶきつちよで、恥ずかしいくらい」

手先はそれなりかもしれないが、恋はどうしようもないくらい不器用だ。一生懸命になったら、猪みたいにまっすぐで、周りが見えていないから空回りばかり。

真白は笑いながら、痛む胸からそつと目を逸らした。

「機会があったら、今度は山手のほうに行ってみるといい。ガイドブックには載ってない温泉があるんだよ」

「知らなかった！ 秘境の温泉ですか？」

「そう。なかなかの絶景でね。俺は今日行ってきたんだ。もうちらほら紅葉がはじまっていたよ。まあ、だいたい歩くけどね。近くに釣り堀もある。マス釣りもしてきたよ」

「わ、すごい。釣れました？」

「マスは結構簡単に釣れるんだ。餌も虫とかじゃないから大丈夫。釣ったマスをその場で調理してくれるんだけど、マスの唐揚げって食べたことある？ おいしいよ。塩焼きよりいいけるかもしれない」

「唐揚げ？ 珍しいですね。じゃあ、わたしもマス釣ったら唐揚げにしなきゃ！」

「塩焼きは結構どこでも食べられるからさ、試してみてもよ。最高だから」

この人の話は楽しい。

彼はガイドブックに頼るよりも、現地の人におすすめされた場所を回るのが好きなんだそう、今回ローズガーデンに行ったのも、今が見頃だと教えてもらったかららしい。

「あとは空港から一番近いホテルに泊まろうと思ったら、ここになったわけ」

「なるほど。ここ、空港がすぐそこでもんね」

真白は新幹線 came が、このホテルは空港にも新幹線にもアクセスがいい。電車一本でどちらにも行けるいい立地だ。彼は日本国内のみならず、世界各国にも足を延ばしているらしく、真白が旅行好きだと知ると、色々なおすすめの場所を教えてくださいました。

「いろんなところに行かれてるんですね。いいなあ、わたしも行きたい」

「現実逃避を兼ねて、ね。あんたもだろう？」

そう言った彼の視線に射貫かれて、真白は一瞬、ドキツとした。まるで失恋旅行をしていることを見透かされているみたいだ。

「……………」

真白がまごついているうちに、デザートのアニバーサリーケーキが運ばれてきた。

小振りのホールケーキは白い生クリームでデコレーションされ、てっぺんにイチゴが花のように載せてある。両サイドには生花が飾られて、お皿にはチョコレートで「Happy Anniversary」と書いてあった。なにもかも注文通りの仕上がりがだ。

なのにそのケーキが目の前に置かれたとき、真白の頬をぼろりと涙が伝った。

「あ、あれ？ なんで……………だろ……………？ ごめんなさい……………わたし……………」

慌てて指先で涙を拭うが、涙腺が馬鹿になったみたいに、次から次へと涙があふれてとまらない。いったいどうしたというんだろう？ 突然泣き出した真白に、周りのお客からチラチラと視線が向けられる。

これでは晒し者だ。恥ずかしいし、なにより一緒に食事をしてくれている彼に申し訳ない。早く泣きやまなくては……………そう思うのに、できない。

このケーキと一緒に食べるはずだった人は、今頃他の女のところにいるんだろう。

本当はだいたい前から、飽きられていたのかもしれない。

もしかして、真白のことなんか初めから好きでもなんでもなかったのかもしれない。

なのに自分は言われるまで気が付かなくて、張り切ってこんなケーキまで用意して……

(わたし、馬鹿だ……)

そのとき、ポロポロと涙をこぼす真白の目の前で、ケーキのど真ん中にフォークがぶすりと突き立てられた。

「っ!？」

驚いて、目を見開く。

固まっている真白をそっちのけで、ケーキからフォークが引き抜かれた。フォークを突き刺したのは、今、目の前にいる彼。

ぶつきらぼうなりに、彼は今まで礼儀正しかった。そんな人の突然の奇行に、なにも言えない。彼はフォークで貫いたイチゴにチョコレートを付けながら、にっこりと綺麗な笑みを見せてきた。「泣くほど喜んでるんだ？　こんなケーキなんかで」

唇の前に、フォークに刺さったチョコ付きのイチゴが差し出される。

彼のひと言を聞いた周囲の空気が、明らかに柔らかくなった。

(あ……)

庇<sup>かば</sup>ってくれたのか。

真白と彼の関係をなにも知らない他の客からしてみれば、サプライズのアニバーサリーケーキに感激して泣いた彼女に、彼がケーキを食べさせようとしているふうに映っているのだろう。いや、そう見えるように、彼がしてくれたのだ。

真白がおずおずと口を開けると、イチゴが口の中に入ってきた。甘酸っぱいイチゴの味が口内に広がる。

「あーあ、チョコ付いてる」

彼は真白の唇を人差し指で撫<sup>な</sup>でて、チョコレートを拭<sup>ぬ</sup>う。そして、チョコレートの付いたその人差し指を、自分の口に含んだ。

目の前で当たり前のように繰り広げられた彼の行動に、カアアッと顔に熱が上がる。涙なんか知らないうちにとまっていた。

「俺も食<sup>く</sup>つていいか？　ケーキ」

ニツと上目遣いで見つめられて、視線が泳ぐ。

「ど、どうぞ」

なんとかそれだけと言った真白は、動揺しながらワインに手を伸ばした。そのままキューツと一気飲みしてグラスを空にする。

(い、今の、かかか間接キス!?)

唇を直接舐<sup>な</sup>められたような気分だ。ドクドクと心臓がけたたましく鳴っている。これはワインのせいではないだろう。

空になったグラスをテーブルに置きながらチラチラと彼を盗み見ると、彼は真白にイチゴを食べさせたフォークで、平然とケーキを口に運んでいる。唇に付いた生クリームを彼が舌で舐<sup>な</sup>め取るのを見て、その艶<sup>なま</sup>めかしさに背筋がゾクツとした。

~~~~~

真白は自分を落ち着けようと、ウエイターから注がれたワインを再び一気に飲み干した。

「ワインばかり飲むと酔いが回るぞ？ ほら」

再びフォークに載ったケーキが差し出されて、ドキドキしながら口を開ける。

「残りはあなたの分だ」

半分になったケーキを皿ごと目の前に置かれる。見ると、皿に書かれていたはずのチョコレート文字が、いつの間にか跡形もなく綺麗に消えていた。彼がケーキを食べている間に消してくれたのか。

(なにも話してはいないはずなのに……)

彼の気遣いに、胸がぎゅっと締めつけられる。嬉しいのか、悲しいのか、自分でもわからない。

真白はぎこちない笑みを浮かべて、ケーキを頬張った。

甘酸っぱいイチゴのケーキは失恋の味だ。終わった恋を忘れたくて、ワインを喉に流し込む。

「おいしいですね、このケーキ！」

「そうだな」

彼が頬杖を突いて、こちらを眺めながら目を細める。

冷めているようで、程よく熱いその瞳がなにを考えているかなんて、初対面の真白にわかるはずもない。

ただ真白は、今ひとりでなくてよかったと、無性に思ったのだった。

「あ〜もお、お腹いっぱあい……」

顔を真っ赤にした真白は、一緒に食卓を囲んでくれた彼に支えられながらレストランを出た。

「つたく。言わんこっちゃない。バカスカ飲みやがって。おい、部屋はどこだ？」

「えへへ。七〇六ですう」

完全に呆れ口調で言われているのに、真白は機嫌よくへらっと笑った。足元がふわふわして気分がいい。こんなに気分よく酔ったのは初めてだ。

酔っぱらいの見知らぬ女なんか、ホテルの人間に任せて放っておくこともできたらうに、そうしないこの人はたいがい面倒見がいい。それに自分を支えてくれるこの人は、とてもいい匂いがする。真白は彼の肩にすりつと頬を寄せた。

旅の恥はかき捨て……とはよく言ったもので、見知らぬ男の人の肩に凭れるなんて地元では絶対にできないのに、今はできてしまう。

真白とこの人が、実は名前も知らない者同士だなんて、周りにはわからない。それでなくても、

真白に興味のある人間なんかいやしない。

仮にこの場に良平がいても、きっと知らんぷりする。

自分は大切に想っていた人からの関心も失った女なのだ。なにをしても、ここには真白を咎める存在なんかいない。そのことが虚しいのに、どこか清々しくて笑いが込み上げてくる。

「ふふ……ふふふ……あははは」

やって来たエレベーターに笑いながら乗り込むと、彼は苦々しく舌打ちした。

『あはは』じゃないだろ。『あはは』じゃ。——あんだ、付き合ってた男に捨てられたんだらう？無理して笑ってなくていいよ。見るこつちがしんどくなる」

「っ！」

一気に酔いが醒める。

この人には詳しい事情はなにも話していない。ただ、「一緒に食事をする相手が来られなくなった」と言っただけだ。確かにアニバーサリーケーキを見て泣いてしまったが、すぐに泣きやんだし、相手に急用が入ったとか、祝い事自体がキャンセルになったとか、他にもいろいろ考えられるはずだ。それだけで「男に捨てられた女」になるはずがない。

「……な、んで……」

驚きを隠せない真白を一瞥した彼は、小さく嘆息して七階のボタンを押した。

「カップルだらけの観光地をひとりで回って、レ・ザムルーズのワインにアニバーサリーケーキなんて、わかりやすすぎだろ。ローズガーデンで自分がどんな顔してたかわかってる？」

笑っていたはずだ。少なくともローズガーデンで彼に写真を撮ってもらったときには、ちゃんと笑っていたはずだ。

「わ、わたしは——」

否定しようとした真白の声を、カラッとした彼の声が掻き消した。

「旅行のキャンセルきかなかったところを見るに、いきなりフラれたとか、当日すっぱかされたとか、その辺りだろう？ 写真撮るときも無理して笑ってさ」

凶星だ。

凶星だが無性に悔しさが湧き出てきて、「今日じゃないです。昨日フラれたんです」と小声で呟く。彼は「どっちでもいいよ、そんなこと」と吐き捨てて、ぐしゃぐしゃと真白の頭を撫でてきた。

彼のその手つきが乱暴なようできて優しくて、急に鼻の奥がツンとする。もう泣きそうだった。「……電話で、『別れよう』って言われました」

「ふうん」

髪で隠れた顔を俯けてボソボソと話す真白に対して、彼の返事は素っ気ない。知らない女から愚痴られても困るだろう。そんなことはわかっているのに、真白はとめることができなかった。

「三年付き合ってたんです。今日が記念日で、なにに別れ話が電話ですよ。わざわざ時間作って会う価値もないってことなんでしょうね。……電話の向こうで女の人の声が聞こえました」

「なんだよ、浮気されて捨てられたのか」

呆れた声に、現実を突きつけられる。

そうだ。三年も付き合った男に浮気されて、電話一本で捨てられたのだ。

真白は自嘲気味に嗤うと、コツンとエレベーターの壁に頭を凭れさせた。

『セックスが下手』って、『まぐる』って言われました。まったく……誰と比較してるんだって話ですよ。わたしは良平しか知らないのに……。わたしにセックスを教えたのは……良平なのに……。

わたしみたいなつまらない女は、一緒にいる意味がないって彼は言ったんです」

「……………」

エレベーターが七階にとまり、無言の彼に促されて降りる。お互いに口を開くことなく廊下を進み、薄暗い部屋に入った。

無駄に豪華な部屋はシンとしていて、今までいたところより温度が下がったように感じる。

開けっ放しにしていたカーテンから夜景がうつすらと射し込んでいて、真白を余計に惨めにさせた。

本当なら今頃、ここで良平と無邪気に笑っていたはずなのに——

(ああ、なんでこんな部屋とつちゃったんだろ……わたし、ひとりなのに……)

「うう……う……」

涙が出てくる。

床に崩れ落ち、三人掛けのソファに突っ伏して嗚咽を堪えながらボロボロと涙をこぼす。そんな真白の頭を、彼がポンポンと優しく撫でてくれた。

「まあ、なんだ。男は他にもいるんだ。浮気するような男と別れられてよかったじゃないか」

言葉を選んで慰めてくれているのがひしひしと伝わってくる。でも涙はとまらない。

真白が好きになった良平は、浮気をするような男ではなかった。そんな男だと知っていたら、三年も付き合わないし、そもそも好きになんかならない。

ちよつと優柔不断なところもあったが、それは優しいからだ。根は真面目だし、明るくて人当た

りもいい。少なくとも真白の知っていた良平はそういう男だったのだ。だから好きになったのに。

浮気するほうが悪いなんてことはわかっている。でも、裏切られた悲しみが拭えない。

確かに真白はセックスに積極的というわけではなかったが、代わりに拒絶したこともない。

女性誌に書いてあるような、「イク」感じがいまいちわからなくても、好きな人に触れてもらえるだけで幸せになれたし、気持ちよかった。ドキドキした。

もしかして、わからないなりにイッたふりや、雰囲気盛り上げるために感じたふりをしてみればよかったのだろうか？ それとも、もつと積極的に良平の上で浮らに腰を振ったり、自分から彼の物を咥えたりすればよかったのだろうか？

セックスさえつまらなくなったら、上手に良平を満足させてあげられていたら——浮気されることも、捨てられることもなかったのだろうか？

「わたしは……そんなに、つまらない女なんでしょうか……？」

「え？」

聞き返してきた彼をガバツと振り返る。

真白は目いっぱい涙を溜めて、彼を見上げた。

「わたしは……、わたしはつまらない女ですか!? ——抱いてください!」

確かめたい。自分の女としての価値を確かめたい。そんな思いで叫ぶ。冷静さなんかなかった。一緒にいることの意味すらないと言った良平の言葉が頭から離れない。

誰でもいい。誰かに「そうじゃない」と言ってほしい——

彼は一瞬驚いたようだったが、苦笑いしながら真白を見つめてきた。

「抱いてくれて……俺的にはあんたは好みだからいいけどさ、あんたはそれで後悔しないのか？」

「好み……なんですか？ わたしみたいなのが……？」

俄には信じがたい。

地味な顔立ちというか、言葉を選ばずに言うならば、真白は完全にモブ顔だ。メイクをしてもノーメイクのときと違いがない。色白なのはいいが、肌の色が薄いついでに存在感も薄い。

しかもこの人の前での真白は、精神的に不安定になっっているせいかな、いきなり泣き出すわ、酔っぱらうわ、ベッドに誘うわで、相当面倒くさい女のはずだ。なのに、好みだなんて。

(……この人は、ものすごく女慣れしているんだな……)

もしくは、蓼食う虫もなんとやらというやつ？

胡乱な眼差しで見つめると、彼の手が伸びて真白の頬に優しく触れた。

「好みだね。可愛いと思うよ。このホテルを選んだのも、レストランを予約したのもあんたなんだろう。ただ大好きな彼氏を喜ばせたかっただけなんだよな？ でもそれが彼氏には伝わらなかった。だから泣いてるんだろ。そういうのって最高に可愛いじゃないか。適当な気持ちで付き合ってた男相手に泣く女はいないよ。あんたの泣き顔は一生懸命だったからこそなんだから」

(ああ……)

また涙が流れた。

彼の言葉は、女の弱さにつけ込んだ甘言だ。そんなこと、頭ではちゃんとわかっている。

彼にとつて自分はただの据え膳。そこに特別な感情はない。

なのに嬉しくてたまらない……可愛い女だと、好みだと言われたのが、無性に嬉しい。恋に一生懸命だった気持ちを優しく肯定する言葉が、自棄になっただけに染み込んでくる。

そう、真白はただ、良平のことが好きで、初めての恋に一生懸命だっただけなのだ。

そしてそれが、報われなかっただけ。

彼は真白の頬を伝う涙を触りながら顔を近付け、耳元で囁いた。

「ほんと、可愛い———もって泣かせてやりたくなる感じで」

「っ！」

思わず大きく目を見開く。そうして見た彼の視線に射抜かれた途端、背中にゾクツとなにかが走った。

これは男の目だ。女を性的な獲物として見る、男の目。

誘ったのは自分のほうなのに、怖くなって視線を外す。しかし次の瞬間、真白はソファに押し倒されていた。

「きゃっ！」

薄明かりの中で、両手をソファの座面に押し付けられ、のし掛かられる。

抵抗しようとしても、男の力には抗えない。

息を呑む真白を悠然と見下ろしながら、彼はニヤリと笑った。

「怯えてる？ やっぱり可愛いな。彼氏は他の女を抱えているのに、あんたは彼氏以外の男を知らな

いなんて不公平だろう?」

台詞は嘲り以外のなにものでもないはずなのに、声が優しい。

彼は押さえつけていた手を離すと、両手で真白の頬を包み込んだ。

大きくて、あたたかい手。その手の持ち主は、唇が触れてしまいそうなほど顔を寄せて、甘く囁いてきた。

「あんたも他の男に抱かれてみればいいんだよ。浮気する男に操を立てる義理なんかない」

囁きと共に、唇を親指でなぞられた。一気に脈が上がる。彼の指の感触だけでなく吐息まで感じて、お腹の奥がゾクゾクした。

彼の瞳の中に泣いている自分を見つけたとき、真白の唇は彼のそれに塞がれていた。

「……っあ……んう!」

小さく声が漏れるのと同時に唇の合わせ目をこじ開けられ、口内に舌が入ってくる。絡まった舌を吸われて、真白の心臓は大きく跳ねた。

これは知らないキスだ。

舌の付け根から先までをつーつと舐め上げ、軽く甘噛みされる。とろみを帯びた唾液を掻きまぜるように口内を蹂躪されて、息が上がった。

「ん……は……あうんっ!」

ようやく唇が離れて息をつこうとすれば、また強引にキスされる。

苦しさに身を振っても、彼は離してくれない。それどころか真白の腰を抱き寄せ、噛みつくよう

に唇を貪ってくる。触れ合っているところを中心に、熱が広がっていく。

知らない男の人にキスされているのに、絡む舌を気持ちいいと感じてしまう。そんな淫らな自分の一面を恥じ入る気持ちと、どうにでもなってしまうという破れかぶれな気持ち合わせ、身体から力が抜ける。

真白はソファに押し倒されたまま、いつしか柔らかく目を閉じていた。

「ん……は……」

くちゅくちゅと音を立てて真白の唇を味わい尽くした彼は、ようやく唇を離れた。そして、コツンと額を重ねる。

自分を映す瞳と目が合った。

「どうする?」

甘い囁きはずるい誘惑だ。この人に抱かれてみれば、心にあいた穴は埋まるだろうか?

その確証はないが、少なくとも、今夜はひとりにならなくてすむ。なにより、この人の腕の中はあたたかい。

今はこのぬくもりが欲しい――

真白は目を伏せて視線を外すと、ポツリとこぼした。

「……抱いて、ください……」

彼は真白の頬を手の甲で軽く撫でると、返事の代わりにまたキスをくれた。

くちゅり、くちゅり……ちゅうつと、重ねた唇を吸い上げるキスは、気持ちよくて泣けてくる。

ここには愛も恋もないのに、こんなに優しいキスがある。ソファの下に落とした脚に彼の手が這って、ワンピースのスカートの中に入ってきた。太腿からショーツに包まれた臀部を撫で回され、ビクツと身体が震える。そんな真白に、彼はキスをしながら囁いてきた。

「怖いかな？ でも自分で望んだことだろうか？」

囁きながら彼は、ショーツのクロッチを人差し指と中指で撫で上げる。それから花卉に埋もれてひっそりと震える真白の蓄を、ぐりぐりと押し潰してきた。

「っ！」

キスの次は胸を触る。そうして徐々に服を脱がして——。そんな決まりきった手順の愛撫しか、真白は知らない。

確かに彼に抱かれることを望んだのは自分だけけど、いきなり下肢を辱められるなんて思わなかった。しかも、今感じたあの疼きはなんだろうか？ 自分の身体にこんなに敏感な処があるなんて知らなかった。

反射的に脚を寄せ、手で彼の胸を押し返そうとした。が、逆に掴まれ、頭の上で両手を押さえつけられる。彼は余裕で、左手ひとつで真白を動けなくした。そして抵抗は許さないとばかりに、敏感な蓄をぎゅつと摘まむ。

「ひうっ!!」

思わぬ強い刺激に、ビクツと腰が跳ねる。

「彼氏より気持ちよくしてやるよ。——ああ、もう元彼か。別れたんだから」

怯えて震える真白を見下ろして、彼は不敵に笑いながら布越しに蓄を撚りはじめた。

「あっ！ やっ！」

人差し指と中指で蓄を引つ掻く。硬くしこってきたそれをくりくりと強弱を付けながら摘まんで、ねちっこく捏ね回す。ここをこんなに触られたことはない。

「ふうあ……んんう……」

「な、に……これ……」

心臓が暴れて息ができない。蓄に触られるだけで、お腹の奥がズクズクしてくる。まだ準備できていない女の身体が、強引な愛撫によって無理やり熱くさせられていくみたいだ。

知らない男の人に身体を弄ばれているのに、怖いはずなのに、吐く息がどんどん熱を帯びていく。「嘔むな。抵抗する必要なんかないだろう？」

嘔みしめた唇を、彼の舌先がチロチロと誘うように這い回る。その瞬間、クロッチの脇からぬりりと彼の指が入ってきた。

「ああっ!!」

閉じていた割れ目を指で広げられ、怯えて震える蓄を直接撚られる。彼は仰け反ってあらわになった真白の喉に熱い舌を這わせながら、花卉の奥でヒクつく蜜口にゆっくと触れてきた。

「濡れてる」

「っ！」

自分でも気付いていなかった身体の変化を指摘され、カァッと顔に熱が上がる。自分で自分が恥ずかしい。

自分から男を誘って、触られて簡単に濡れて……どれだけ飢えているんだ。顔を背けて腕で顔を隠そうとするが、そもそも腕が押さえつけられているからできない。

真白が顔を真っ赤にして震えていると、蕾がピンと弾かれた。

「ひゃあああっ!？」

目の前に火花が散って、身体がビクビクと跳ねる。まるで電気を流されたような衝撃に、真白は目を見開いた。

(い、今の、なに?)

良平とのセックスでは感じたことのない衝撃だ。良平はあまりそこを触らなかつた。胸はたくさん触ってきたが。

真白が密かに動揺していると、頬に掛かった髪をどかすようにスリスリと頬擦りされた。

「なかなかいい声じゃないか。これでまぐろはないなあ」

「え……?」

揺れる視線を向けると、頬にちゅつとキスされる。彼は真白の蕾を弄びながら、男と女で多少解釈が違うかと前置きして、話を続けてきた。

『男にとってのまぐろ女』は、男がなにしたって反応がまるっきりない女のことだ。あんたは感

度はいいよ? むしろ、よすぎるくらいだ」

「ああっ!」

中に指が入ってきて、そのまままぐろりと掻き回される。いきなりすることに唇を噛むのも忘れて、真白はあられもない声を上げた。

「いやあっ! あ、あうっ!」

みっちりと蜜口を埋められ、中を引き伸ばされる感覚。たぶん、一本じゃない。二本……もしかしたら三本、指を挿れられているかもしれない。いきなりたくさん指を挿れられて、お腹が熱くなる。

「ううう……」

彼は悶える真白の中で軽い散策でもするかのように二、三度、指を出し挿れした。そしてじゅぽつと指を引き抜く。

「はあんっ!」

「それに濡れやすい。見てみなよ俺の指」

目の前に掲げられた彼の指が、薄明かりの中でもはっきりとわかるほど、テラテラと濡れている。彼が人差し指と親指を軽く擦ると、指の間をねばり気のある細い糸が引くのが見えた。

「~~~~っ!」

自分のいやらしい汁を見せつけられて、真白は涙目になって顔を逸らした。

知らない男の人に触られて、あんなに濡れてしまう自分が信じられない。そしてなにより恥ずか

しいのは、彼の指でこじ開けられていたあそこが、ヒクヒク疼くことだ。

身体の奥からいやらしい汁が垂れてきて、真白は思わず内腿を寄せた。だが彼は気にした素振りすら見せずに、真白の耳の裏を舐めてくる。

「ひうっ！」

普段、人に触られることのない処を舐められて、咄嗟に変な声が出る。そんな真白を見てふっと笑うと、彼は押さえつけていた手を離した。

「こんなに感度のいい女をまぐる扱いつて。さてはあんた、彼氏にイカされたことないな？」  
本気でギクリとした。

確かに真白は、絶頂というものを知らない。触られて、それなりに気持ちいいとは感じるが、それ以上の快感は知らなかった。雑誌の体験談に書いてあるようなドラマティックな性的快感は、AVと同じで完全にフィクションだと思っているクチなのだ。

「やっぱりな。可哀想に。濡れやすい体質だからって雑な前戯しかされてなかったんだな。せつちな男なら、女が濡れたらすぐ挿れるだろうし。そして自分だけ気持ちよくなって、ハイお終い。どうせ挿れる時間も短かったんじゃないのか？」

「……………」

なんでこの人はそんなことまでわかるのだろうか？

確かに真白は良平とのセックスで、すぐ濡れていた。キスされただけでも濡れた。それは彼のことが好きだからと思っていたのだが、それが体質だったって？

真白が濡れたら良平がすぐ中に入ってくるのも、求めてくれていたからじゃなかったのか。ただ、自分が気持ちよくなりたかっただけ？

良平が動いている時間が長いか短いかなんて、比べる相手がないからわからない。けれどどりあえず、ラブホテルの時間延長はしたことがない。

良平が終わったらセックスは終わりだし、二回目は良平の気分次第。セックスとは、そういうものだと思っていたのだが――

(も、もしかして……………違うの?)

シヨックを受けているのが顔に出ていたのか、彼は真白を見て軽く嘆息した。

「あのな、男だけ気持ちよくなってどうするんだよ。惚れた女が自分の腕の中で乱れるのを見るのが最高に楽しいのに。聞いてるとき、あんたの彼氏はメンタルが童貞だ。自分に都合のいい女を求めてる。あんたを大事にしてない。下手くそなくせに浮気して、自分を想って泣いてくれる女捨てて何様だよ。気に入らないな！」

ここにはいない良平に向かっていきなり怒りだした彼に呆気に取られて、反応ができない。

でも、不思議と心のどこかがすっきりした。

もしかして真白は、誰かに同情してほしかったのではなく、誰かにこの理不尽を怒ってもらいたかったのかもしれない。悪いのは真白じゃないと。

「あ、ありがとう……………そう言ってもらえると、なんだか――」

――嬉しい。そう言おうとした真白の声を、彼が突然遮った。

「俺があんたをイカせてやるよ」

「え？ あ、きやあつ!？」

彼の言葉を理解する前に、スカートが捲られる。驚いて、自由になっていた手でスカートを押さえようともがいた。

「な、なに？」

「俺があんたに、本当のセックスを教えてやる」

そう言った彼の目は、今まで以上に熱く鋭くなっている。

その目に怯み、思わず動けなくなったとき、ショーツのウエスト部分から彼の手が入ってきた。

「あ、やつ！」

脚をバタつかせるが、ぱつくりと開いたあそこに無理やり指をねじ込まれた。

また、指を挿れられてしまった。何本挿れられたかわからないが、とろとろに濡れているから、根元まで簡単に入っていく。

「あ……あ……あ……」

「大丈夫」

震える真白のこめかみにキスをして、彼はゆつくりと指を動かしてきた。

長い指を奥まで挿れられ、ぞろりと肉壁をなぞられる。さつきよりも深いところを触られ、いやらしい汁がじわつと滲んだ。

(ま、た……濡れて……)

どこまで自分は濡れやすいのだろうか？　これが体質？

ワンピースは着たまま、下着の一枚だつて剥ぎ取られていない。なのに真白のあそこは、濡れていく。恋人でもない、知らない男の人とキスをして、その人の指を咥え込んで喘ぐ。そんな自分があまりに淫らで、羞恥心だけで死んでしまいたいそうだ。

「ンッ……だめ……」

「ここか？」

探るような動きで、お腹の裏にあるザラついた処をしつこく擦られ、真白は呻くように声を漏らした。そこを攻められると、なんだか身体の奥がズクズクするのだ。

真白の膣がぎゅうつと引き締まると、彼の指の動きが突き上げるようなそれに変わった。そこを擦り上げながら、奥を突かれる。突き上げの圧が凄い。何本もの指で、自分の中が奥から広げられていくのがわかる。

もがいた手は、いつの間にか彼のシャツを握りしめていた。

「んう……は、うあ……んんん……なに、これ……やだ……こんな、やだ……」

怖くて、恥ずかしくて、熱くて、気持ちいい。

知らない男の人の指が自分の中を好き勝手に動いているのに、気持ちよくなってしまうのが怖い。未知のなにかが、身体の奥から迫り上がってくるようだ。こんなの知らない。

このなにかから逃げないと、取り返しのつかないことになってしまふ気がする。

「や、やだ……こわい……やめて、やめて、おねがい……だめ、だめなの！」

「怖くない。気持ちいいだけだ」  
泣きそうになって見上げると、囁きと共にぎゅっと抱きしめられる。彼は、優しい表情をしていた。

こんなに優しく抱きしめないでほしい。出会ったばかりのくせに。恋人でもなんでもなくせに。こんな、まるで大切な女を抱くような……

「大丈夫。大丈夫……俺に任せて。俺はあんたを傷付けたりしない」  
指が深くなるのと同時に、唇が塞がれる。

「んっ………んは………やああ……」

吐息にまじって、ふたり分の唾液があふれて顎を伝った。口内に舌がねじ込まれ、呼吸もままならない。上からも下からもいっぱい挿れられて、苦しくてたまらない。自分以外の体温に内側から侵食されているのに、その熱が気持ちいいのはなぜ？

膣肉が勝手に蠕動して、悦んで男の指を貪っている。こんなのは屈辱だ。そう思うのに、身体は一方的に快感に堕ちていく。

身体の中から、自分の意識だけがどこかに飛んでいきそうさ。

真白が堪えるように目を瞑ったとき、蕾がぐにゅっと押し潰された。

「……………ッ!？」

身体がビクツと仰け反る。その反応に合わせるように、中をいじる指の数がいきなり増えた。

「……………!!」

入り口がみっちり引き伸ばされ、指が激しく出し挿れされる。もうこれ以上入らないのに、奥まで挿れられて、しかも蕾まで捏ね回されるなんて。

逃げたいのに逃げられない。頭が真っ白になっていく。

強すぎる快感に翻弄されて、真白は彼に、泣きながら縋っていた。

「あああああんっ！ いやああ！ うっ、ううう……」

キスをしたまま泣き叫んで、一気に脱力する。自分がどうなったのかわからない。

「はああああはあ……んっ、はああああはあ……」

目を閉じて、肩で息をしながらぐったりとソファに沈む。そんな真白の頬に、そっとキスが落とされた。

「イッたな」

囁きながら、毗からあふれる涙を舐め取られる。

「……………こ、れが……イクって、こと……?」

過去の記憶のどこにもない快感を与えられて、心と身体が戸惑う。今までのセックスの価値観がひっくり返されそうさ。

知らない男の人に、イカされてしまった。こんなことがあっていいのだろうか？

良平にテクニクがなかったとしても、彼のことが好きだったから、抱いてもらえるだけで満足していたつもりだった。なのにそれが全部、自分の身体に否定された気分だ。

混濁した意識の中に沈んでいた真白の身体が、急にふわりと浮いた。

(え?)

重たい<sup>まがた</sup>臉を持ち上げると、壁紙が動いているのが視界に入る。不自然な現象に目を見開くと、なんと、彼に横抱きに抱き上げられているではないか!

「え!? な、なに?? なにするの!?’

驚いて、自分を抱く人を見上げる。すると彼は不敵に笑って、真白をベッドに寝かせた。

『なにをするの』って、セックスだけど?’

「~~~~っ!」

ドストレートな物言いに、真白のほうが赤面してしまう。

(た、確かに、わたしが誘ったんだけど! だけど!)

あんな激しい絶頂を体験させられたばかりで、まだ自分の中で整理がついていない。本当にこの人に——知らない人に——抱かれてもいいものと迷う自分もいる。それに身体のほうがも<sup>けだる</sup>気怠い。しかし彼ははずいぶんと乗り気のように、及び腰の真白を前に、躊躇<sup>ためら</sup>う素振りもなく自分のジャケツトを脱いだ。

清潔な白いシャツのボタンがひとつずつ片手で外されていく。あらわになっていく首元と広い胸板を見て、勝手に心臓がドキドキしてきた。

枕元のランプが、彼の男らしい肉体を臙<sup>むらさ</sup>氣に照らす。

この人は魅力的だ。綺麗な顔立ちに、真白の知らない性技。そして確かな優しさも感じる。でも、知らない人だ。知らない人とこんな深い関係になるべきではないと、自分の中の良識<sup>よが</sup>が咎める。

「あ、の……わたし……やっぱり……」

ベッドの上をじりじりと後退するが、この人に絶頂を味わわされてしまったばかりの身体は思うように動かない。

上半身裸になった彼が、どこから出したのか避妊具片手に面白がるように迫ってきた。

「俺じゃ不満か? 浮気した彼氏よりは、あんたを大事にしてやれるし、満足させてやれると思うけど?’

ベッドヘッドに手が当たった。もう壁際だ。これ以上逃げられない——そこまで追い詰められたとき、ふわりと彼が微笑んだ。

「本音を言うよ。あんたを俺の女<sup>もの</sup>にしたくなかった」

「え……?’

出会ったばかりで、この人はなにを言っているんだろう? 意味が理解できない。

呆けて固まっているうちに、そのまま抱きしめられた。

優しい抱擁<sup>まよ</sup>だった。あたたかくて、いい匂いがして、ドキドキが加速する。

へたり込んだ真白が逃げないのいいことに、彼は真白の顎<sup>あご</sup>を持ち上げると、そのままキスしてきた。

(あ……)

挿<sup>い</sup>れられた舌が口内で絡む。もう何度この人にキスされただろう? 唾液を纏<sup>まと</sup>った舌を強引にすり合わせ、絡めて吸う。吐息ごと奪うような激しいキスなのに、どこか甘い。逃げなければと思う

のに、甘さに酔った身体が動かないのだ。

彼はキスをしながら、真白の背中に手を回し、ワンピースのファスナーを下ろした。

「んう……は……んっ……」

真白の肩がピクツと強張ると、キスがより深くなる。彼は唇を舐めるようにねっとり口付けながら、真白の肩からワンピースとキャミソールを同時に落とした。

ブラジャーが見えて、慌てて胸を押さえようとする。しかし、その手は一瞬で掴まれてしまった。

「あ……」

彼は真白の両手を握り、そっと指を絡めてきた。両手を恋人繋ぎにして、キスに没頭する。

くちゅり、くちゅり、くちゅ……

舌が絡む音と共に、ゆっくりと唇が離れた。散々吸い付かれた唇は腫れぼったくて、熱い。唇だけでなく、身体も――

上半身裸の彼を前にして、目のやり場に困る。真白が視線を泳がせると、首筋に唇が当たった。首筋、鎖骨、胸の膨らみ――なぞるように落ちていくその唇に、ぶるりと肌が粟立つ。

息を呑んだ真白に、彼の低い声が届いた。

「ああ……いいな。真っ白だ……」

「っ！」

名前を、呼ばれたのかと思った。

教えてもないし、ただの偶然だ。なのに心臓の高鳴りがとまらない。それと同時に、「この人に、

最後まで抱かれたらどうなるんだろう？」という思いが生まれる。それはただの興味というより、女の本能だったかもしれない。

「いいだろう？」

見上げてくる彼の眼差しが熱い。女を求める男の目だ。その目が、真白の中の女に火をつけた。

「……ん」

小さく頷くと、彼の目がすうーと細まって、唇が弧を描く。不気味なくらいに綺麗な笑みだった。

トサツと軽い音を立てて、彼が横向きにベッドに倒れ込む。すると手を繋がれたままの真白も、当然つられる。彼は手を繋いだまま、口だけで真白の乳房を愛撫してきた。

大きくもなければ、小さくもない。そんな平均的な乳房が甘く囁かれて、くいくいと乳首を擦るようにブラジャーが押し上げられる。それはもどかしい疼きだ。

今すぐこの手を離して、ブラジャーを剥ぎ取れば、舐めるのも揉むのも思いのままだろうに、この人はそうしない。

ブラジャーに顔を擦りつけ、谷間に鼻を埋めて、カップからあふれた乳房を舐める。まるで焦らされているみたいだ。ぶっくりと立ち上がった胸の先が熱くなってくる。

今すぐこの人の口でここを吸ってほしい――舐めてほしい。しゃぶってほしい。囁んで……

(そ、そんなはずは……)

自分の身体の欲求を否定し、プイッと顔を背ける。けれどあそこから、ぬるぬるした汁が次から